誌上行学講習会

高佐日煌上人

人間の心を浅いところから深いところへと段々と研究して行く。井戸を掘るにしても水脈の浅いところのものはすぐ枯れる。ですから必然的に深く深く掘り下げて行く。そうすれば水は枯れず良い水が出る。これと同じように心を深く深く掘り下げるのであります。その心の奥の奥を知ると実際に驚く程不思議なことを発見できます。こういうあり方を立体構成というのであり、このように人間の心をみて行くのが＜整識観＞なのであります。

第八課　知覚識

「第八課　知覚識

一、知覚識の配列を、眼、耳、鼻、舌、身の順序に依る理由を知ることは心理学上重要な意味を有つものである。」

どういうわけでこのような順序にするかということでありますが、一番目に眼、次に耳、三番目に鼻、四番目に舌、五番目に身となっている。五官というのですから、どう並べてもよさそうなものである。近代心理学では全く逆に配列されている。

「近代心理学の五官の配列は、殆ど此の反対であって、第一身（皮膚）、第二舌（筋肉）、第三鼻（口腔）、第四眼、第五耳の順序に依つている」

これは鼻だけは真中ですから、どちらから言っても三番目になる。この外は全く逆です。おもしろいですね。人間の顔を見ると誰でも鼻は真中にくっついています。

「これは解剖学の発展次第に例つたものである」

解剖学、つまり人間の体の出来具合いを刀で切って中をのぞいてみる学問であります。したがってその順序によれば、人間の身体は皮膚でつつまれていますから、まず皮膚を切るところから参ります。皮膚を切り開くと中に筋肉がある。人間の舌は筋肉の先端であります。次に、舌のつけ根から上に穴の二つあいているところを口腔といっています。つまり鼻であります。鼻をすすりそこなうと口の中に残って出て来る。ごはんを食べていてむせると鼻の中に米つぶが飛び込んだりする。次は眼、元来眼と鼻とは涙線でつながっている。涙は眼のところと鼻のところと両方へ通って出てくる。だから泣くときには必ず眼をふくだけでなく鼻をかむ。泣くと鼻がつまる。次は耳。耳も考えようによっては鼻と大きな関係をもっている。鼻を強くかむと耳がボーッといたします。このように近代の解剖学によればこのような順序になる。しかるに仏教はそれに依っていない。その理由は何でありましょうか。

「仏教の配列に就て、唯識に離中知、合中知の説倶舎に五根所依の上下の説が、古来の定説になっているが、共に不完全である。」

（以下次号）